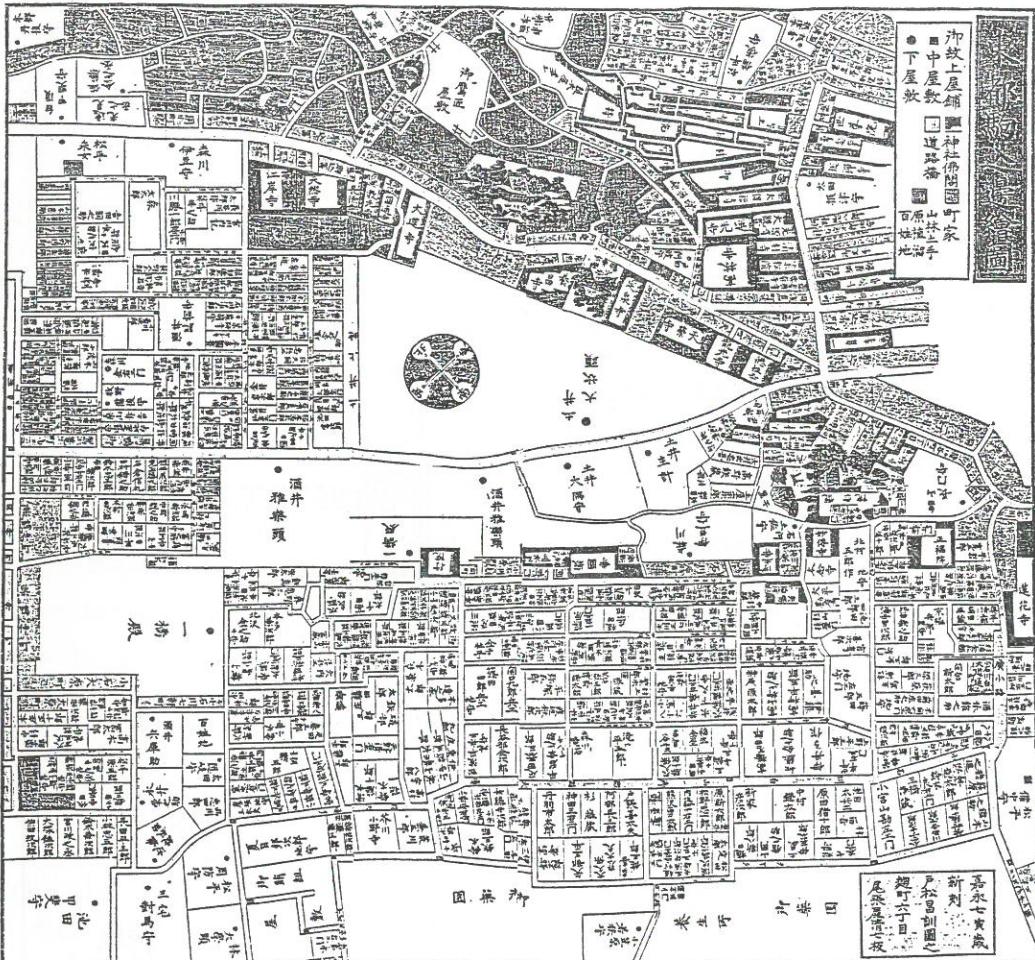


KΟΣΜΟΣ

コスモス No. 81 1988 春

特集

大学生だったら この本を!!



貴重書「御江戸切絵図集」22 東部駒込邊繪圖（原寸タテ50cm×ヨコ52cm）戸松昌訓著 嘉永7(1854)年
現在の東洋大学白山校舎は中央右、ほぼ土井主計（講武所奉行）の下屋敷跡。

貴重書から

ディヴィッド・ヒューム 『四論考集』について

文学部哲学科教授 斎藤繁雄

およそ思想家の思想を知るには、その生涯を知ることが肝要といわれる。従ってまたその著作の刊行過程を知ることは、きわめて重要であり、興味あることである。ヒュームは一般に「無神論者」といわれ、彼の宗教関係諸論考は大きな反響と共にしばしば問題をおこしたことは周知の事実である。そこで『四論考集』の中の『宗教の自然史』の公刊経過を中心に解説してみたい。

ヒュームの『宗教の自然史』は『自然宗教に関する対話』その他二、三の宗教的論考と共に彼の代表的宗教論であり、ヒュームの「宗教哲学および宗教心理学のそれぞれに対するもっとも包括的でもっとも重要な貢献」とされている。

この二作品のうち、一般には後者がその公刊に関するいきさつその他の事情もあって、よりしばしば問題とされてきた。しかし思想内容や後世への影響という点から見れば、地味で、一見より穏健な『宗教の自然史』の方がはるかに重大な意義をもっている。

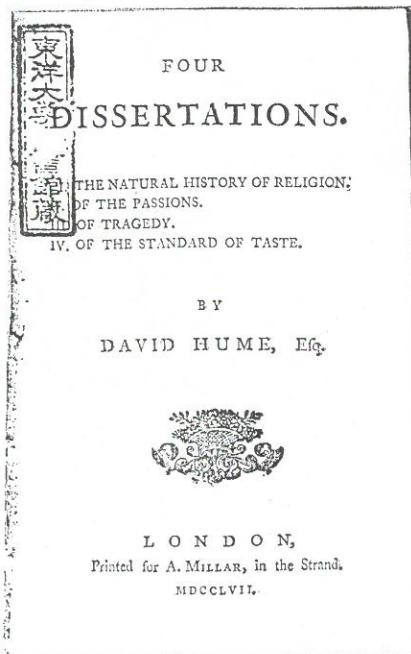
ヒュームは周知の有名な『自伝』の中で『宗教の自然史』は「その世間への登場はどちらかといえば人目をひかなかったが、唯一の例外はハード博士がウォーバートン派独特の例の偏狭な短気、傲慢、罵詈雑言の一切を用いて一反駁冊子を書いたことであった」とあるごとく『宗教の自然史』も出版当時は、決して成功作ではなかった。当時ヒュームは彼の歴史家としての文名を大いに高めるとともにさまざまな物議をかもした『英國史』2巻 (History of England, vol. I. [James I. and Charles I.] 1754. vol. II. [Charles II. and James II.] 1756.) を完成し、引き続き、3、4巻を執筆中であり、その間において、いわば息抜きのような形で公刊したのがこの『宗教の自然史』を含む論文集であった。

『宗教の自然史』の出版の事情に関しては、古

くはバートン (John Hill Burton: "Life and Correspondence of David Hume, 1846", 2 vols.) 次いでグリーン・グロース版ヒューム全集(David Hume: "The Philosophical Works", edited by Th. H. Green and Th. H. Grase, 4 vols.) における解説、最近ではモスナー (E. C. Mossner) 等の研究により詳細な事情が判明している。それらの文献によれば『宗教の自然史』は次のような幾多の変遷を経て刊行に至った。

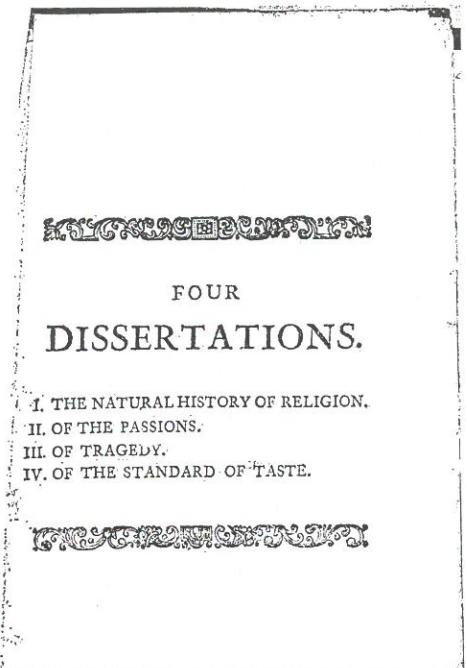
1 最初ヒュームは次の4論文を1冊にまとめ公刊しようと考えた。(I) 「宗教の自然史」(The Natural History of Religion), (II) 「情念論」(Of the Passions), (III) 「悲劇論」(Of Tragedy), (IV) 「幾何学および自然哲学以前の諸論考」(Consideration previous to Geometry and Natural philosophy), このうち(II)は『人間本性論』第3巻の抜粋要約であり、(IV)は同じく『人間本性論』の第2巻第2部の部分的要約であったらしい。そしてこの4論文は1755年には完成していた。

2 ところが、組みにかかった段階で以上四論考中の第(IV)論文のみは回収され、出版が断念された。ヒューム自身が晩年において一出版者に告白したところによれば、スタノブ卿というアマチュア的な、しかし当時としては権威として通用



していた一自然科学者がこの論文を読んで、その論旨ないし觀点に欠陥があると批判したためこのような結果をまねいたのであるという。ただしヒュームの原稿自身が紛失されているので、詳細な事情は分らない。

3 こうして論文集は三論考となったが、これだけでは1冊の書物にならないという出版者の意見からヒュームは「自殺論」および「魂の不死性論」の二論考を書き足し「五論考集」(Five Dissertations, to wit, The Natural History of Religion, Of the Passions, Of Tragedy, Of Suicide, Of the Immortality of Soul) という題名で印刷を完了させた。追加2論文が完成されたのは1755年—1757年の間であり、この『五論考集』が印刷直前の状態にまで完成していたことは、校正刷りの綴本が後々まで残存していたことにより明らかである(1875年まで弁護士会図書館—後のスコットランド国立図書館—にこの綴本は現存していたといわれている)。それにもかかわらずこの『五論考集』をヒュームは「慎重な配慮から出版中止した」、「それらは印刷されたが、早くも私は後悔した。そしてミラー氏〔出版者〕と私は両者の負担でそれらを出版中止した」(Letter to William Straham, 25, 1, 1772.)。以上のヒューム自身の説明だけでは細かい事情が不明であるが、おそらくアダム・スミスその他の友人の警告もあったらしい。というのは1749年(『人間知性の研究』"An Enquiry concerning Human Understanding"—当時は『人間知性に関する哲学的諸試論』"Philosophical Essay concerning Human Understanding, 1748"という表題で1748年に発行された。)以来ウォーバートンがヒュームの宗教的見解を無神論的であると追及中であり、たまたま彼は出版者ミラーから公刊前に『五論考集』をみせられていよいよ憤慨し、もしこの著作が刊行されたならば、発禁処分にするよう警察、司法関係、教会方面に働きかけるとミラーを脅迫したらしい。ミラーはこの圧力に屈してヒュームを極力説得し、問題の2論文を削除させ、さらに「宗教の自然史」中の誤解を受けそうな2箇所を訂正するに至った。かくして『五論考集』はまたもや三論考と化した。



4 上述の如く三論考では1冊の書物にまとまらないので、ヒュームはここで改めて『趣味の規準論』(Of the Standard of Taste) を穴うめに加えた。この論考は1756年春ないし夏に完成したと推測される。

5 かくして『四論考集』(Four Dissertations, I. The Natural History of Religion, II. Of the Passions, III. Of Tragedy, IV. Of the Standard of Taste, 1757) が1757年2月7日に公刊された。

このような難産の末、『四論考集』は世に出たのであるが、ヒュームの訂正にもかかわらず『宗教の自然史』は、なおウォーバートン一派から激しい追及をうけた。(詳細は「ヒューム宗教論集」I. 『宗教の自然史』福鎌忠恕、齋藤繁雄訳、解説参照、法政大学出版局)

以上の如く本『四論考集』は『宗教の自然史』というヒュームの代表的著作の成立事情に關係した諸問題ばかりでなく、一般にヒュームがいかに同時代の学界ないし読書界を考慮しつつ執筆したかという後期ヒュームの性格を裏付ける作品集として貴重な著作集である。論文集ないし著作集にはこのような歴史文献的価値があることも改めて反省されるべきである。(さいとう・しげお)

特集

大学生だったら この本を!!

パートランド・シュナイダー著

裸足の革命一自立をめざす

第三世界の農民たち

河地和子

第三世界に関する情報は、最近日本で増えつつある。アフリカの飢餓、干ばつ、それに対する救援活動の様子など、貧困の実態はかなり詳しく伝えられてきた。だが我々は、第三世界の人々が貧困から豊かな未来を切りひらくために、どんな努力と苦労をしているかを知っているだろうか。

本書はアジア、南アメリカ、アフリカの各地で、農民たちがどのような地域開発をはじめたかを知らせてくれる貴重な啓蒙書である。彼らは、先進国諸国の派手な慈善事業、アスワン・ダムに見られるような従来の大規模な開発が、自分たちの生活を向上させる助けにならなかったことに気付き、自分たちの責任で経済開発を行いはじめた。そうした自覚の元になされている地道な草の根運動を「裸足の革命」という。

農民が自分たちの力で考え、新しい地域社会を作るために、どんな努力をしているか本書を読んで知って頂きたい。

(文学部助教授 かわち・かずこ)

* 田草川弘訳 (サイマル出版会、1987年)

木下是雄著

理科系の作文技術

今村 肇

わたしはこの本をむしろ文科系の学生諸君に読んでもらいたいと思います。少なくとも、日常の講義や演習で課題レポートなどの文章を書く必要のある人にとっては必読の書だと思います。冗談抜きにしてこれでレポートの点数は大いに稼げるはずです。ただし、少なくとも新書判で244ページのこの本を最後まで読み終えることが出来る人に限ります。

ではなぜ並みいる古今東西の名著をさしあいて

この本を一番に推薦するのでしょうか。それは、レポートなど学生諸君の書いたものを読む先生が少しでも悲鳴をあげなくてすむようにと願うからです。これは世界平和と同じくらい重要なことです。

例えば私の場合レポートの採点をしながら、よく「ぎゃっ」とか「ゲッ」とか声をあげます。何を言っているのかまるっきり見当のつかないレポートが、私の机のうえで居直るからです。さあ評価を下せ、コメントを書けと言われても、この場合、出来ない相談というものです。レポート本来の教育効果も上がりませんので、このような事態は未然に防がなくてはなりません。

ところが、日本の大学では自分の言いたいことをはっきりと主張するための訓練は、カリキュラム上ほとんど行なわれません。そこで、この本の出番になるわけです。「文章の構造と流れ」「はっきり言いきる姿勢」「事実と意見」「わかりやすく簡潔な表現」……とならんだ本書の各章は、必ずや新しく誕生した大学生諸君に、大きな力を与えてくれることでしょう。

(経済学部専任講師 いまむら・はじめ)

* 中公新書 624 (中央公論社、昭和56年)

川島武宜著

日本人の法意識

今上益雄

わが国では一般に、私人間の紛争を訴訟により解決することを嫌う傾向があるといわれます。欧米なら当然であるような場合に訴訟を起す者は、「変り者」、「訴訟気違い」等の烙印をおされがちです。それは何に起因するのか。これを日本人の法意識あるいは法に関係する意識下的心理状態から説き明かそうとするのが本書です。すなわち、現在の日本法の原型を作りあげた明治の法典の体系は、極めて西歐的であるため、「書かれた法」と「社会行動の次元における法」との間に深刻なずれがあり、そのずれは具体的にどのようなもの

であったか。それがその後の日本の近代化の過程でどのように変化し消滅しつつあるかを明らかにしようとする野心作です。そして、本書では、法「意識」という上部構造に限らず、それを生み出し維持している経済的、社会的、政治的諸条件にも数々のエピソードを引用しながら論じられており、私自身多くの教示を得たものです。

本書は、民法、法社会学の権威である著者が市民講座での講演内容を全面的に書き改めたものであり、表現にもそれなりの工夫がされており、鋭い問題提起にもかかわらず、法律の専門家でない人も、気軽に読み進めることができるでしょう。

いずれにせよ、本書が公刊された1967年当時では、この分野は全く未開拓の状態にあり、その後の研究にインパクトを与えたものとして良く知られています。本書を読み進める場合、20年余の歴史の歩みが本書の問題提起にどのように変化を生ぜしめたか自分なりに併せ考えると、興味は倍加することでしょう。

(法学部教授 いまがみ・ますお)

* 岩波新書 630 (岩波書店, 1967年)

ライナー・フランク著

エーリッヒ・フロム 人と思想

菅野重道

わが国の精神病理学、精神分析の流れは、ドイツ、オーストリアなど、ドイツ語文化圏の強い影響を受け、ドイツに留学した人たちも多かった。

ナチスの台頭と支配、第2次世界大戦と進むにつれ、ナチスに追われたり、ナチスの支配から逃れて、アメリカ、イギリスなどへ渡った、精神分析学者も多く、ベルリン、ウィーン、ブダペストなどの精神分析の研究機関も、次々と閉鎖されていった。

ここにアメリカに渡った精神分析学者たちに、アメリカの学者、研究者と交流することによって、いわゆる精神分析の文化社会学派、いわゆる新フロイド学派として発展することになった。

この新しい精神分析の流れは、わが国でも、戦後の精神病理学、精神分析、臨床心理学、社会心理学、ソーシャルワークなどの発展と実践的研究に大きな影響を及ぼした。

エーリッヒ・フロムは、この新しい流れの中心的な存在となった人たちの一人で、社会学者、社会心理学者として出発し、精神分析の訓練を受けて、フランクフルトとベルリンの精神分析研究所から、フランクフルト社会研究所、ニューヨークのコロンビア大学の社会研究所、ニューヨーク精神分析研究所、メキシコ精神分析研究所と、歴史的世界的な変動の下に移り住みながら、研究を続けていった。

思想、研究の発展について、特定の個人の成長、生活の歴史を通じて理解することは、ことに若い人たちには大きな意味があるものと考え、本書を推薦するわけである。

(社会学部教授 かんの・しげみち)

* 佐野哲郎、佐野五郎共訳 (紀伊國屋書店, 1984年)

渡部昇一著

知的生活の方法 (正・続)

幸田浩文

学生諸君の中には、本とは縁遠い高校時代を過してきた人たちが意外と多かったのではないだろうか。かくいう私もそうだった。書棚には、教科書と参考書の類いの他には、まったくといって本はなかったし、またその必要もなかった。

同級生の中には、いわゆる文学青年があり、彼の大文豪の作品についての評論を聞くにつけ、それらを読んでいない自分が恥ずかしかった。そのことが、大学に入ってからも強迫観念となり、私の頭から離れなかった。

そのような時出会った1冊の本が、当時流行語ともなった渡部昇一著『知的生活の方法』(講談社新書)であった。今まで、読書ということに身構えていた私に、本との真の楽しみ方、つき合い方を教えてくれたのがこの本であった。

当時、小説を読むのにもかなりの意志を必要とした私にとって、勉強ならば意志の力でやらなければならぬが、余暇の時間に読む小説にまで意志やおつき合いを持ち込むと、ほんとうの感興とおぎなりの感興との区別がつかず読書の力もつかないという言葉は、ショックだった。私は、自分をごまかさないこと、知的正直であることが一番であることをこの本から学んだ。

さらに、本書の中で興味深かったのは、そこで知的生産の場である書斎とその技術について触れた「知的空間と情報整理」についての箇所である。その後、本書に啓発され、学究生活に入った私は、現在曲りなりにも知的生活を営んでいる。

諸君も、この本をきっかけに、「知的生活」を送ってみませんか。

(経営学部教授 こうだ・ひろふみ)

* 講談社現代新書463, 538 (講談社, 昭和51, 54年)

枠にとらわれず自由な読書から

菅原国香

趣味はと聞かれて、読書と答えられる人はとても羨ましいと私は思う。しかし感心ばかりもしていられない。ひらき直ると案外と自分に適した方法を見いだし歩きだしている自分に気づく場合がある。「習うより慣れよ」ということも実感としてわかってくる。

受験参考書を読むように読んだものは覚えなければならぬという癖、「読書しなければ」「勉強しなければ」など「ねばならない」という癖をはやく捨てるとよいと思う。関心のあるものは手当たりしだいに読む、結果として記憶に残り感動したものの大半にする。

私は対談形式の本が楽で何んでも好きである。たとえば古典なら、ガリレイ「天文対話」上・下(訳本岩波文庫), 湯川秀樹のファンだったので「湯川秀樹対談集」(講談社文庫)は何度か読んだ。文庫本は手がるで読みやすい。朝永振一郎『物理学とは何だろうか』上・下(岩波新書)も、いくつかの疑問をといてくれる本である。案内書的なものを見て食欲をかりたてのもよい。たとえば『物理・ブックガイド100』『数学・ブックガイド100』(培風館), 金子務『AINシュタイン・ショック』(河出書房新社)が最初に目にとびこんでくる。

大岩正芳『初等量子化学—その計算と理論』(化学同人)。この著者は量子化学を専門としていた人ではない。それが1つ1つ実際に計算して意味を確かめて進む。門外の私には好きな本である。でもこの種のものは、意図をはっきりもち、最後までつき合うことをすすめる。諸君が自分に適し

た方法を見つけることを期待しよう。

(工学部助教授 すぐわら・くにか)

*ガリレオ・ガリレイ「天文対話」上・下(岩波文庫, 昭和45)／「湯川秀樹対談集」(講談社文庫, 1980)／朝永振一郎「物理学とは何だろうか」上・下(岩波新書, 1979)／「物理ブックガイド100」(培風館, 1984)／「数学ブックガイド100」(培風館, 1984)／金子務「AINシュタイン・ショック」I・II(河出書房新社, 1981)／大岩正芳「初等量子化学」(化学同人, 1965)

ポール・サムエルソン著

サムエルソン経済学(上・下)

小沢健市

米国西海岸研修旅行から帰国すると、「図書館ニュース」編集者の方から筆者宛に「大学生だったらこの本を!」というタイトルで原稿執筆の依頼が寄せられていた。与えられたタイトルを思い出しては溜息ばかりついていたというのが偽らざる心境であったが、依頼の手紙に書かれてあった「研究の志を支えているような書物」という一文を寄りどころにして、『サムエルソン 経済学(上下)』(都留重人訳 岩波書店)を推薦することにした。

本書を推薦した理由は、筆者と経済学の出会いが本書(確か原書第7版)であったこと、そして筆者の辿ってきた道が正に本書に述べられていた「新古典派総合」(但し現在(原書第11版)では、それは削除され、「ケインズ後の主流派経済学」となっている)であったからである。

本書は、近代経済学の入門書ではあるが、「何とはなしに普段着すがたで語るかにみえる平俗性の背後に、近代経済学の最前線でめったに誰にもひけをとらぬすぐれた理論経済学者の危なげのない問題掌握がかくされており、そこには二度三度と読み返すに値する奥行きがある」という訳者序文の言葉が正にふさわしい書物である。

筆者に「経済学という未知のそして興味の尽きない世界」への探検を経験させてくれたのが本書であり、その感動を多くの学生諸君と共有したいと思い、本書を推薦した次第である。

(短期大学助教授 おざわ・けんいち)

*都留重人訳(岩波書店, 1981年)

レファレンス・ケーススタディ (1)

法律書の略語のナゾを解く

「大判昭 9.8.22. 新聞3746号11頁」とは?

現在の情報化社会といわれる世界では、OEC Dとか経団連とかの様々な略語が氾濫しています。

今回はこれらの略語のうち、法律学関係の雑誌や本に頻繁に登場するものを紹介いたします。

「大判昭 9.8.22. 新聞 3746 号11頁」というの

は、「昭和 9 年 8 月 22 日に出た、大審院民事部判決が法律新聞の3746号の11ページに掲載されている」という意味です。

下に略語の一覧表を示しました。なお、請求票には雑誌名を略さず書いてください。

法律関係雑誌略語一覧

(※所蔵せず)

略語	雑誌名	請求記号 (白山)	(朝霞)
大審民集(大判民集)	大審院民事判例集	Z 327. 122 : D	Z 320 : D-4
大審刑集(大判刑集)	大審院刑事判例集	Z 327. 122 : D	Z 320 : D-6
民録	大審院民事判決録	Z 320. 98 : D-4	Z 320 : D-2
刑録	大審院刑事判決録	Z 326 : D	Z 320 : D-5
行録	行政裁判所判決録	Z 323 : G	※
新聞	法律新聞	Z 320. 51 : H	Z 320 : H-7
評論	法律評論	Z 320. 51 : H-5	※
判決全集	大審院判決全集	Z 320. 98 : D-3	※
民集	最高裁判所民事判例集	Z 320. 98 : S : 2	Z 320 : S
刑集	最高裁判所刑事判例集	Z 320. 98 : S : 3	Z 320 : S-2
裁判集(民事)	最高裁判所裁判集(民事)	※	※
裁判集(刑事)	最高裁判所裁判集(刑事)	※	※
高裁民集	高等裁判所民事判例集	Z 320. 98 : K	Z 320 : K
高裁刑集	高等裁判所刑事判例集	Z 320. 98 : K-2	Z 320 : K-2
下級民集	下級裁判所民事判例集	Z 320. 98 : S-3	Z 320 : K-3
下級刑集	下級裁判所刑事判例集	Z 326. 098 : S-3 : 3	Z 320 : K-4
一審刑集	第一審刑事裁判例集	Z 326. 098 : S-3 : 2	Z 320 : D-7
刑裁月報	刑事裁判月報	Z 327. 615 : S : 2	Z 320 : K-5
行裁月報	行政裁判月報	Z 323. 95 : G-3	※
行裁集	行政事件裁判例集	Z 323. 95 : G-2	Z 320 : G
労民集	労働関係民事裁判例集	Z 366. 1 : S-3 : 2	Z 320 : R
家裁月報	家庭裁判月報	Z 327. 123 : K	※
東高時報(民事)	東京高等裁判所民事判決時報	※	※
東高時報(刑事)	東京高等裁判所刑事判決時報	※	※
税訴資	税務訴訟資料	Z 345 : Z-2	※
判時	判例時報	Z 320. 98 : H-6	Z 320 : H-4
判タ	判例タイムズ	Z 320. 98 : H-7	Z 320 : H-6
金法	旬刊 金融法務事情	Z 338. 32 : J	※
金商	金融・商事判例	Z 338. 098 : K	未分類

略語	雑誌名	請求記号（白山）	(朝霞)
交通民集	交通事故民事裁判例集	※	※
訟月	訟務月報	※	※
シート	シートイエル	Z 345 : S	※
労判	労働判例	Z 366 : R-3	※
労判速	労働経済判例速報	Z 366.18 : N	※
ジュリ	ジュリスト	Z 320.51 : J	Z 320 : J
別冊ジュリスト		Z 320.51 : J : 2	未分類
ジュリスト増刊		Z 320.51 : J : 8	※
増刊総合特集		Z 320.51 : J : 4	※
増刊基本判例解説シリーズ		Z 320.51 : J : 5	※
増刊基礎法学シリーズ		Z 320.51 : J : 6	※
増刊法律学の争点シリーズ		Z 320.51 : J : 9	※
判決の略語			
区判	区裁判所判決	大刑判	大審院刑事部判決
控判	控訴院判決	大決	大審院民事部決定
高判	高等裁判所判決	大判	大審院民事部判決
最判	最高裁判所判決	大連判	大審院民事連合部判決
		地判	地方裁判所判決

★図書館案内★

白山図書館一所蔵雑誌はナ・ナント7,000種

4階	視聴覚室 第4~5閲覧室 教員・院生閲覧室 円了資料室 第1~3共同研究室
3階	軽読書コーナー 休憩コーナー 第1~3閲覧室
2階	入カウンター 開架書庫 参考・雑誌室 目録コーナー 新聞コーナー 自動複写機 ロッカー 事務室
1階	事務室

朝霞分館—映画も上映 視聴覚ホール

3階	第3閲覧室 視聴覚室 視聴覚ホール 共同研究室 貴重書室 マイクロ資料室
2階	入カウンター 参考図書室 雑誌室 新聞コーナー 目録コーナー コピーコーナー プラウジングルーム 事務室
1階	第1閲覧室 第2閲覧室

工学部分館—森の中の静かな図書館

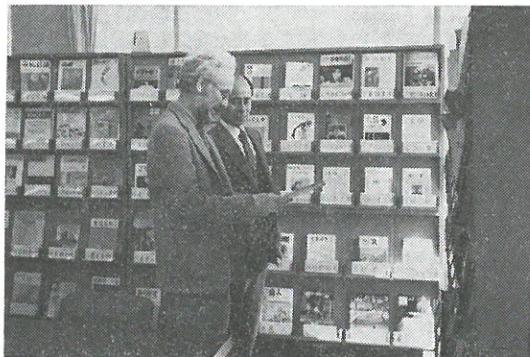
2階	カウンター 参考図書 視聴覚資料 雜誌 目録カード 閲覧席 開架書架 教職員閲覧室 休憩コーナー
1階	ロッカー 新聞架 複写室 事務室 閉架書庫

休館日：各館共、日曜日および国民の祝日、本学の記念日、年末年始、本学または各館の必要とするとき。

※詳細は、「利用のしおり」を御覧下さい。

★海外からの見学者★

3月10日、マールブルグ大学（西独1527年創立）のMichael Pye教授が図書館を見学されました。



資料を興味深くご覧になる教授（左）

編集後記 今回からレファレンス・ケーススタディがスタートします。皆さんお普段頭を悩ませている事柄をズバリ解説していきます。ご期待下さい。